
インドネシアにおける民族語存続の展望*

内海 敦子*

要 約

インドネシアは約 700 もの言語が話されている多言語国家である。そして、国家語として用いられているのはインドネシア語という威信の高いムラユ（マレー）語変種である。インドネシアのほとんどの地域では、国家語たるインドネシア語とそれぞれの民族語が併用されている。本論文では、インドネシア語とムラユ語クレオール変種、民族語の使用範囲に焦点をあてて、それらの関係性を、民族語の活力（バイリティ）が強く威信が高い場合、威信が低く話者数もそれほど多くないものの地域共通語としての使用が安定している場合、多くの民族語が狭い地域に存在しそれぞれの話者数が少ない場合などのパターンに分けて論じる。

キーワード：インドネシア語、マレー語変種、多言語社会、民族語と国家語、社会言語学

1. ムラユ語（マレー語）の概略

「ムラユ語（マレー語ともいう。名称について詳しくは第 2 節を参照）」はオーストロネシア語族の西マラヨ・ポリネシア諸語に属する。ムラユ語が元来話されていた祖地としては、マレー半島とスマトラ島の海峡あたりの地域が有力であるが、その他にマレーシア半島の西側、スマトラ島、ボルネオ島の西側などの候補がある。ムラユ語が広範囲に用いられるきっかけの一つは、シュリーヴィジャヤ王朝（7～13 世紀）の公用語としても用いられ、書き言葉としても確立されたことである。その後マラッカ王国（15～16 世紀）でも公用語として用いられ、文学や公式文書を含む多くの文献が残されている。

ムラユ語は Old Malay 期、Classical Malay 期、Pre-Modern Malay 期、Modern Malay 期、などに分けて論じられることがある（Andaya 2001, Sneddon 2003 他）。Old Malay は 7～14 世紀、Classical Malay は 14～18 世紀、Pre-Modern Malay は 19 世紀、Modern Malay は 20 世紀以降というのが大体の年代である。

Old Malay はインド文明からの影響を色濃く受けサンスクリットの語彙を取り入れた。通称パッラウ文字¹⁾を用いた 7～10 世紀の碑文がスマトラ島およびジャワ島中部から見つかっている。7 世紀を頂点とするシュリーヴィジャヤ王国時代に、その版図に広まった。Classical Malay はイスラームの影響を強く受けアラビア語からの借用語を多く取り入れた。マラッ

* 日本文化学科 准教授 言語学

カ王国との関連が強い。この時代に書記言語として確立し、Classical Malay で書かれた文献は法律など公式文書から文学まで幅広い分野のものが残る。文字はジャーウィ (Jawi) と呼ばれるアラビア文字をムラユ語の特徴に合わせて若干修正したものを用いた。このジャーウィは現在のブルネイでも用いられている。17世紀からはローマ字を用いた辞書などがヨーロッパ人によって作成された²⁾。

マラッカ王国は通商の要衝として隆盛を極めたため、通商用語としてのムラユ語の使用が格段に広まった。中国の諸言語 (特に福建語) の語彙・特徴やヨーロッパ諸語の語彙を取り入れ、ピジン³⁾ となり多くの民族に使用された。Milner 2008によると、18世紀初頭のオランダの学者 Valentijn が、エリート層が用いるムラユ語変種は 'jawi' と呼ばれ、庶民の口語変種としては 'kacukan (混合言語)' あるいは 'pasara (市場の言語)' と呼ばれていたと記している。前述のように 'jawi' とはそもそもアラビア文字によるムラユ語の書記方法を指すのであるから、Valentijn のいう 'jawi' はエリート層の使用する、書記言語としても確立している変種である。また 'pasara' は現在のインドネシアでは 'pasar' と発音され、'bahasa pasar (市場の言語、英語では Bazaar Malay)' は今でもインドネシアで多くの人によって、ピジン化した口語変種のムラユ語を示す呼称として用いられる。同じく Milner 2008によると、17世紀の文書にはインド洋とマレー諸島 (インドシナ半島とオーストラリアの間の多島海) だけでなく、中国や日本にかけて広範囲に用いられる通商用語であったと書かれている。特にマラッカ海峡 (マレー半島とスマトラ島の間) からジャワ島の北側、カリマンタン島、スラウェシ島南部、マルク諸島にかけての東西に広がる海域ではシュリーヴィジャヤ王朝の影響もあってピジン化したムラユ語が使用されていたと記されている。15世紀以降、この海域に香料等の貿易のためにヨーロッパ人もムラユ語ピジンを用いて通商を行うことが多かった。それ以前より通商を行っていたアラブ人や中国人もムラユ語ピジンを使用していた。このようにムラユ語は通商の目的のために自然発生的に広範囲で用いられている言語であったため、各地域で様々な呼称を持っていたことは容易に想像できる (第2節参照)。

なお、通商用語のピジンがクレオール化したのも、Classical Malay 期であると推定される (Sneddon 2003)。Ternate Malay, Ambon Malay, Manado Malay などの東部インドネシアに広がる「ムラユ語クレオール変種 (第2節参照)」やスマトラ島の Palembang Malay と呼ばれる Musi、ジャカルタ近辺で話される Batawi が発達した。

16世紀にはポルトガル、17世紀にはオランダが植民地化をこころみはじめ⁴⁾、これらの言語からの借用語が入ってくるようになった。19世紀にはマレー半島ではイギリスの支配、インドネシアの領域ではオランダの支配が確立する。同時に東部インドネシア (北スラウェシ、アンボンやヌサ・トゥンガラ諸島など) をはじめとする地域でキリスト教化がはじまった。その他の地域でも植民地時代のエリート層にはキリスト教に改宗したものも多かった。イスラームの影響が及んでいなかった地域でも植民地時代にキリスト教を受け入れた。

オランダ植民地時代の1872年、マラッカとリアウ諸島のムラユ語を標準とし、1901年にファン・オブハイゼンの正書法によって綴り方が定められた。この書き言葉として制定された言語は「標準マレイス (Standaard Maleis)」と呼ばれ、下級から中位の役人の用いる言語となった (森山 2009)。ただし、多くの話者を擁する民族語もオランダ植民地政庁によってある程度保護され、ジャワ語、スダ語、バリ語、バタック語などで書かれた教科書や読

み物が作成されていた上に、一番民衆と近い立場の地方役人は民族語で文書を作成し、中位の役人はマレイス、高位の役人はオランダ語で文書を作成するというヒエラルキーが確立していたため、地方語の使用も活発であった（森山 同上）。日本軍政期には標準マレイスが教授用言語として採用され、独立後のインドネシアにおいて様々な変革を経ながら標準変種として制定されるに至る。その後は民族語の公用語的な性格は失われ、公的な言語としてはインドネシア語標準変種のみが認められるようになった。

しかしながら、独立後インドネシアの国民となった者のうちムラユ語を母語とするものの割合は非常に低く、通商用語の第二言語として用いるものも限られていた。元々ムラユ語系民族語が話されていた地域を除き、通商に携わらない者や海から離れた地域に居住する者がムラユ語を使用することはほとんどなかった。独立にあたって、このムラユ語（を基礎としたインドネシア語）が国語として選ばれた大きな理由として次の三点が挙げられる。第一点目は、通商用語として広まっていたため、ムラユ語が多少とも使用できる第二言語話者が広範囲に存在していたことやスマトラ島と、スマトラ島とマレー半島の間の諸島においてはムラユ語系民族語が存在していたことである。第二点目は、ムラユ語の威信の高い変種（Bahasa Jawi など書き言葉を持つフォーマルな変種）の母語話者の人口比率が著しく低いために、特定の民族と関連付けられることがない中立的な言語と認識されたからである（ただし「ムラユ語系民族語」の口語話者はスマトラ島やカリマンタンに多く存在していた）。第三点目は、他の多くの言語、特に同じく国語の候補となっていたジャワ語などに比べると比較的簡単に習得できる言語だったことである。特に階級や年齢などの上下関係によって語彙を変えなければならない敬語体系が複雑なジャワ語よりはムラユ語の方が習得が容易であると考えられた。

結果として、特定の民族色がついていないムラユ語を基盤として制定した「インドネシア語標準変種」を国家語としたことは、統一国家言語を広めるという目的からすると、大成功であった⁵⁾。ただし、1968年の小学校（当時の唯一の義務教育）のカリキュラムにおいては、6年間で840時間、全体の13.48%を、民族語の授業に割り当て、1年生から3年生までの授業は民族語が教授言語として使用されることが定められていた（Rusyana [1982]）。しかし、1975年のカリキュラム改正で科目としての民族語が削除されることになり、カリキュラム外で週に二時間程度の民族語の授業しか認められないことになった。

現在のインドネシアでは、「インドネシア語口語変種」を多少とも話す国民が大部分であり、特に1960年代以降に出生した者、つまり学校教育が安定的に運営されはじめてから教育を受けた者は、基本的に書き言葉にも不自由なく「インドネシア語標準変種」を使用できる。大学教育も基本的にインドネシア語で授業を受けることができる⁶⁾。

その反面、「インドネシア語標準変種」「インドネシア語口語変種」「ムラユ語クレオール変種」のようなムラユ語の変種（詳しくは第2節を参照）が勢力を強めたため、その他民族語の勢力が大変弱まっている。第6節以降で民族語の活力と生存の展望についてムラユ語系民族語と非ムラユ語系民族語、それから民族語の規模によって異なる様相をみせることを論じる。

2. ムラユ語（マレー語）変種にかかわる用語

ムラユ語は、21世紀初頭の現在、3億人近くの話者を持つ大言語である。ムラユ語の様々な変種を話す人々の大多数はマレーシアとインドネシアの両国に存在する。ムラユ語変種を国家語としているのはマレーシア、インドネシア、ブルネイの三か国であり、シンガポールでは四つの公用語のうち一つとされている。

ただし、それぞれの国での国家語の呼称はそれぞれ異なっている。マレーシアでは「マレーシア語（Bahasa Malaysia、英語名は Malaysian）」、インドネシアでは「インドネシア語（Bahasa Indonesia、英語名は Indonesian）」とされる。シンガポールとブルネイでは、英語名は「マレー語（Malay）」、ムラユ語名は「ムラユ語（Bahasa Melayu）」とされている。マレーシア語（Bahasa Malaysia）はマレーシア政府により標準語として制定された変種の名称であり、インドネシア語（Bahasa Indonesia）はインドネシア政府によって標準語として制定された変種の名称である。

両者は音価の表記に関してはほぼ一致をみている⁷⁾。しかし、それぞれの標準と考える変種の音声を基にしていたり、これまでの書記言語の伝統を踏まえていたり、ヨーロッパからの異なる借用語の書記方法の影響（インドネシアではオランダ語、マレーシア語では英語）があったりして、実際の綴りは多くの語において一致していない。例えばほぼ同じ音声の「金銭」を意味する語はマレーシア語では 'wang' であるのに対し、インドネシア語では 'uang' となり、「なぜなら」を意味する接続詞はマレーシア語で 'karana'、インドネシア語で 'karena' となる。

上記のマレーシア語とインドネシア語は国家の名前を冠した、国家が制定した変種名なのであるが、シンガポールとブルネイでは「民族名」とされている 'Melayu（英語では Malay）' を言語の名称として用いて、「ムラユ語（Bahasa Melayu）」（英語では Malay）と呼ぶ。

このように、言語学的には同じ言語と考えるとよいムラユ語は多くの名称を持つ。「ムラユ語」というのが言語名である。「ムラユ（Melayu）」は英語では「マレー（Malay）」となるため、「ムラユ語」と「マレー語」は原語の音声に忠実であるか、英語名を基にしているかの違いとしてよい（ただし、Melayu と Malay のそれぞれの名称の由来に関しては様々な議論がある。Milner 2008などを参照）。以下では原語に近い「ムラユ語」の表記で統一する。

これに対し、「マレーシア語」と「インドネシア語」という呼称はそれぞれの国家によって規定された標準変種の名称である。口語ではほとんど用いられない語、表現、文法的特徴を持っている。従って、多くの話者はそれらの呼称によって指示する対象を、書記言語たる威信の高い変種で教育機関で習得すべきものと考えている。

インドネシアの人々にとって、「ムラユ語」という呼称は、日常生活で用いられる口語も含む、「インドネシア語」よりも幅広い変種を指すものだと考えられることが多い。高齢のインドネシア人の中には日常的にムラユ語を用いているにも関わらず「インドネシア語はあまりできないが、ムラユ語は話せる」という人がいる。これはムラユ語の口語変種は問題なく使用できるが、国家が制定した標準変種たる「インドネシア語」を話したり、文章を流暢に書いたりすることには自信がもてない、ということの意味している。

シンガポールとブルネイで「ムラユ語」(英語名は Malay) を用いるのは、これらの国においてはマレーシアあるいはインドネシアという他の国家の名前を冠することがふさわしくないとされているからである⁸⁾。

本論文ではインドネシアにおける多言語状況に関して述べるため、インドネシア政府の規定した書き言葉としての言語変種を「インドネシア語標準変種」と呼ぶ。インドネシアにおける自然発生的なムラユ語の口語変種は、以下の二種類に分けることが必要である。一つは「ムラユ語系民族語」、もう一つは「ムラユ語クレオール変種」と呼ぶ。「ムラユ語系民族語」とは、スマトラ島やマレーシア半島に多く存在する諸言語で、ムラユ語の系統である。これらは民族ごとに異なった特徴を持つように発達しており、インドネシアではそれぞれの民族名を冠して呼ばれている。例としては、スマトラ島で話されているミナンカバウ語(Bahasa Minangkabau) やクリンチ語(Bahasa Kerinci) が挙げられる。

もう一つの「ムラユ語クレオール変種」は通商用語として用いられていたピジンのなムラユ語から発達してクレオール化した変種で、インドネシアでは主に東部に広がっている。ヌサ・トゥンガラ諸島、マルク諸島、スラウェシ島、パプア島西部(インドネシア領パプア州、旧名イリヤン・ジャヤ州) で用いられているムラユ語の口語変種はすべてこの「ムラユ語クレオール変種」にあたる。その他、ジャワ島の首都ジャカルタ周辺およびその近郊(ジャボデタベック、Jabodetabek)⁹⁾ で話されている口語変種も様々な言語の話者が話すことにより形成されたクレオールであると考えられる(第1節で触れた同じくムラユ語クレオール変種の Batawi がジャカルタ変種に大きく影響している)。これらの変種は日常生活のインフォーマルな場面(近所の人や学校の友達との会話、市場での会話)で用いられる。もともと広域で用いられていた通商用語ではあるが、土着化しており地域的な変異は多い。「ムラユ語系民族語」は音声・音韻面での変異が大きい、「ムラユ語クレオール変種」も音韻の脱落や母音の変化など音声・音韻面の変異が大きいのに加え、その地域のムラユ語系以外の民族語や外国語の借用語を大幅に取り入れているので語彙面の変異も大きい。「ムラユ語系民族語」はすべて第一言語である。「ムラユ語クレオール変種」も多くの地域で若い世代(地域によって異なるがおおむね 1970 年~1990 年以降に出生した世代)の第一言語となっている。

「ムラユ語系民族語」と「ムラユ語クレオール変種」の他に、口語変種として「インドネシア語口語変種」という分類も必要であろう。これは国家語、標準語、書記言語として制定された「インドネシア語」を実際に話すときの変種である。標準変種として規定されているものの、実際に発音するときには各地の民族語の影響を免れることはできない。結果として、音韻の変異が多少はみられる。若干の母音と子音の変異、およびストレスの位置の変異が目立つが、全体としてそれほど顕著な地域差はない。この「インドネシア語口語変種」はテレビなどの放送、教育機関、政府などの公的機関、イスラームやキリスト教など宗教儀式において用いられる。この変種はある程度の公的教育を受けたものでないと話せないという第二言語的な性格を強く帯びている。

まとめると、本論文においてはムラユ語変種のうち、「インドネシア語標準変種」をインドネシアの国家語として規定されており、かつ書き言葉として確立された変種を表す用語として用いる。その他、基本的に口語であり第一言語として用いられているもののうち、民族語を「ムラユ語系民族語」、通商用語のピジンから発達し特定の民族との関係が希薄なもの

を「ムラユ語クレオール変種」と呼ぶ。口語ではあるが「インドネシア語標準変種」を基にした、第二言語的 성격が強く教育機関で習得される変種を「インドネシア語口語変種」と呼ぶ。

追記しておくべきなのは、ムラユ語クレオール変種のうち、ジャカルタ近辺で話されているジャカルタ方言はテレビなどのメディアでバラエティや音楽番組で放送されることが多く特別に勢力が強い方言である。

3. インドネシアの言語事情の概略と「民族語」と「地方語」

インドネシアは、オランダが植民地として支配していた地域の住民が団結し、第二次大戦時の日本軍による短期間の支配を経て1945年8月17日に独立宣言を行い、その後三年間のオランダとの独立戦争を経て1948年に名実共に独立を果たした。ジャワ島、スマトラ島、カリマンタン（ボルネオ）島、スラウェシ（セレベス）島の四つの大きな島と、イリヤンと呼ばれるパプアニューギニア島の西半分（パプア州、1969年に併合）を中心に、大小合わせて総数1200を超える島々からなる。

インドネシア国家の地域には多くの王国が盛衰を繰り返した。シュリーヴィジャヤ王朝（スマトラ島とマレー半島中心、ジャワ島の中部まで、7～13世紀）、マラッカ王国（スマトラ島中央東部とマレー半島、15～16世紀初頭）、ヒンドゥー・マタラム王国（ジャワ島中部中心、8～9世紀）、イスラーム・マタラム王国（ジャワ島中東部、16～18世紀）などがあげられる。

これらの島々には二億五千万人前後の人々が住んでおり、多数の民族に分かれる。SIL International¹⁰⁾による算出では726（そのうち719が現在話者のいる言語）の言語があるとされている。多数がオーストロネシア語族に属するが、オーストロネシア語族に属さないパプア諸語¹¹⁾はこのうち270前後あるとされる。オーストロネシア語族に属する言語群は、系統がはっきりしているだけに、幅広く共通される語彙がかなりあるものの、形態論と統語論の分野においては、類型論的には様々の異なる特徴を示す。また、パプア諸語においてはその中の細かな系統関係はまだ明らかになっていないが、少なくともいくつかの異なる系統のものがあるとされる。

これらの言語は、地理的に隣り合っていても相互理解が不可能なものも多い。本論文ではインドネシア各地に存在する各民族の言語を「民族語」(Ethnic language、インドネシア語ではBahasa sukuあるいはBahasa kebangsaan)と呼ぶことにする。

上記のように多言語が存在するインドネシアでは、スハルト体制下¹²⁾に分離・独立の動きを防ぐ目的で民族色を出すことを極端に制限されていた。各民族が話す言語もそれぞれの地域の言語、インドネシア語ではBahasa Daerah（地方語）と言い換えられた。インドネシアにおいて「地方語」という名称が指すものを分類すると以下の三つになる。第一に、「各民族の言語」をさす。例えばジャワ語、スンダ語、マドゥラ語といった話者数千万におよぶ言語も、数万人以下の話者しかもたない少数言語も含まれる。第二に、「地域共通語」として、つまりある程度広い範囲に通用する共通語として用いられるが、全国的には用いられていない言語で、その地域の大多数を占める民族の言語を指す場合がある。第三に、同じ

く「地域共通語」としての性格を持つが特定の民族に関連づけられていない「ムラユ語クレオール変種」の場合がある。このように「地方語」は三つの異なる対象を指しうるため混乱をまねく恐れがある。従って本論文ではインドネシアの言語状況を説明するときによく用いられる「地方語」の名称は避けたい¹³⁾。

その代わりに「民族語」という用語を以下で用いる。「民族語」は特定の民族が話す言語と認識されている言語である。例えばジャワ民族の話す「ジャワ語」(ジャワ島中部・東部の他、国内移民によりバリ島、スマトラ島南部をはじめ多くの地域に広がる)、バリ民族の話す「バリ語」(主にバリ島)、ササク民族の話す「ササク語」(主にロンボク島)などを指す。ここに挙げた三つはムラユ語とは異なる言語(非ムラユ語系民族語)である。このほか、ミナンカバウ語やクリンチ語(両方ともスマトラ島)は前節で述べた「ムラユ語系民族語」である。

本論文で「民族語」という場合は、特定の民族によらず地域共通語として用いられている「ムラユ語系クレオール」を含まないこととする。

4. インドネシア語と民族

4.1 インドネシアの民族とその人口比率

前述のように、インドネシアには2億5千万人ほどの人々が住む。表1に示したのはインドネシアにおける主な言語の話者数をグラフにしたものである。「インドネシア語標準変種」および「インドネシア語口語変種」は、人口のほとんどがある程度の能力を備えているとしてよいが、教育を十分受けていない高齢者や幼い子供は除く必要があるので2億2000万人ほどであろうか。表1には第一言語あるいは話し言葉として使用する言語の話者数の概略を示した¹⁴⁾。700ほどの言語のうち、34の言語が100万人以上の話者を持ち、合計で1億8400万人ほどとなる。それ以外の670の言語の話者を合計すると6500万人ほどになる。単純計算では一言語あたり10万人弱の話者がいることになるが、実際には30万~90万人程度の話者を持つ言語が二十数言語あり(合計1300万人ほど)、大半の言語は一万~十数万程度の話者を持つにすぎない。ユネスコの統計で数人~数万人程度の話者しかおらず、消滅の危機に瀕した言語(ユネスコの尺度で vulnerable~extinct)は143言語ある¹⁵⁾。

これに対し、非常に大きな言語がいくつかある。ジャワ語は8430万人、スンダ語は3400万人、マドゥラ語が1630万人となっている。ミナンカバウ語(ムラユ語系民族語)が550万人、パレンバン・マレー(あるいはムシ語、ムラユ語クレオール変種)が390万人、プギス語、バンジャル語(ムラユ語系民族語)、アチェ語、バリ語も300万人台の話者を持つ。これらの言語の大きさは、ヨーロッパのフランス語話者が8000万人、オランダ語話者が2300万人、フィンランド語話者が540万人、エストニア語話者が110万人などと比べると、それぞれ国家語の規模であるといつてよい。

主にスマトラ島とカリマンタンに存在するムラユ語系民族語はいくつもの言語に分かれているが、表1ではムラユ語系パタック諸語(パタック民族に含まれるとされる民族の話す諸語で、言語境界での方言連続体が存在し、方言同士と考えられる諸語もあるが、互に通じない諸語もある)とその他ムラユ語系民族語に分けて二つにまとめた。それぞれの民族語の

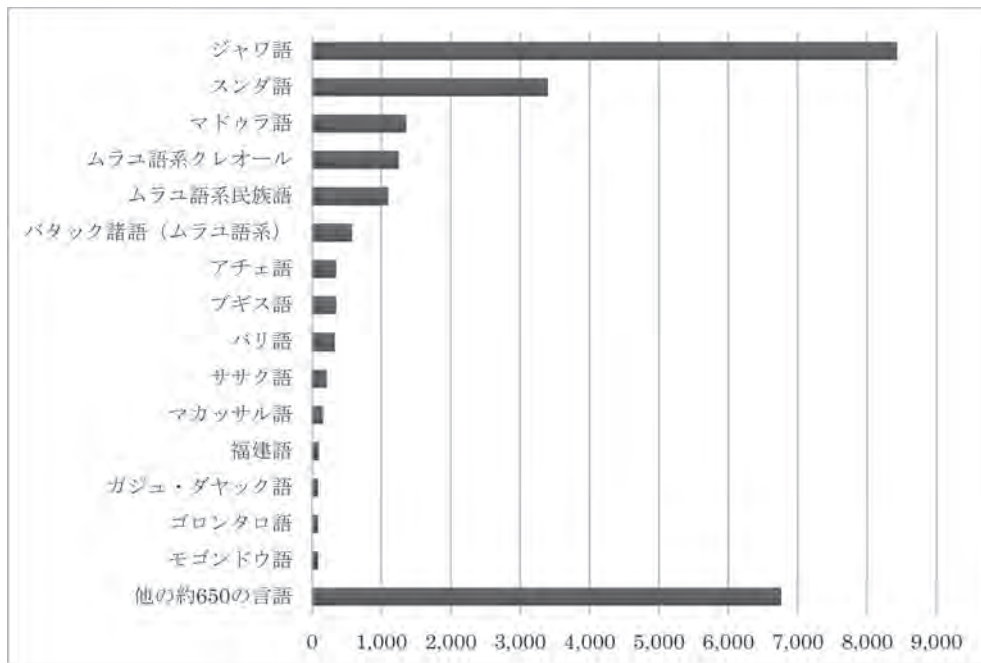
話者は数万～200万人程度である。全体でムラユ語系民族語は1100万人程度の話者、バタック諸語は合計580万人程度の話者をみとめられるので、ムラユ語系民族語のみで1700万人弱の話者が存在する。その他、ムラユ語クレオール変種の第一言語話者も1600万人程度は存在すると考えられる。これらムラユ語に属する変種の話者を合計すると3300万人くらいになるであろう。

ムラユ語系民族語とムラユ語クレオール変種の話者は、L変種（次節参照）としてこれらの言語を使用しているので、インドネシア語になじみやすい¹⁶⁾。これに対し、ムラユ語系以外の民族語の話者は、かなり特徴の異なるインドネシア語を習得しなければならない。二言語を習得しなければならないため、負荷が大きい。

現在のようにインドネシア語がインドネシア国内に行き渡り高等教育までインドネシア語で受けることができ、良い就職機会を得るためにはインドネシア語標準変種の習得が必須である社会では、民族語が軽視されていく。多くの話者を持つ言語はともかく、話者が十数万以下の少数言語の継承が難しくなっているのが現実である。

インドネシアでは表からも読み取れるように、言語の話者数のばらつきが非常に大きい。従って、各言語の置かれた状況も大きく異なるのである。

表1：インドネシアの主な言語と話者数（万人）



4.2 民族語のおかれた状況

スハルトが権力の座についてから（正式には1968年以降）、言論の自由は制限され、地方自治も著しく制限された。国家語たるインドネシア語をすべての公的な場面で使用することが求められるようになり、民族語および民族文化は表立って振興することを妨げられた。公

立学校での教育に民族語が取り入れられることはほぼない状態であった。

スハルト失脚後の1999年以降、ハビビ大統領やその次のアブドゥラフマン・ワヒド大統領の統治下で地方自治が進められるような法律が整備されたものの、地方自治におけるその効果は限定的であったが(Erb, Sulistiyanto and Faucher 2005)、民族語と民族文化の振興は徐々に進んでいった。

ただし、インドネシア語標準変種の教育が津々浦々にいきわたった一方で民族語の使用が制限されたスハルト体制の約30年の影響は色濃く残っている。少数言語は世代間の伝達をされなくなり消滅の危機に瀕している。ジャワ語やスンダ語のような大言語であってもいくつかのレジスターにおける変種(儀式用の古い言葉や高い敬意を表す表現など)が使用されなくなってなりつつある。第6節では、ケーススタディとしていくつかの言語を取り上げる。

5. インドネシアの諸言語の威信と言語使用域(レジスター)

多言語が話されている地域、あるいは同一の言語であっても十分に異なるいくつかの変種が話されている地域では、それぞれの言語あるいは変種は異なる言語使用域(レジスター)を持つようになる(Ferguson 1954)。大きく分けると威信の高い変種(H変種)と威信の低い変種(L変種)になる。H変種は書記言語として確立している変種であり、政府機関、放送・新聞・ラジオなどのマスメディア、宗教儀式、教育機関で使用される格式の高い変種である。第二言語的性格が強く、なんらかの教育機関である程度意識的に習得する必要がある。これに対し、L変種は書記言語としての基盤がうすく、話し言葉中心で用いられる。近隣の人々との会話や市場での会話、友達や家族・親族との会話で用いられ、自然に獲得する第一言語であることが多い。

インドネシア語標準変種およびインドネシア語口語変種はまぎれもないH変種である。民族語(ムラユ語系民族語を含む)に関しては、その規模や書き言葉の伝統によってはH変種とL変種のいずれをも持つ場合と、L変種しか持たない場合がある。ムラユ語系クレオールはほぼL変種のみと言える。一般的に言って、十数万以下の話者しかもたない言語には書き言葉の伝統がなく、H変種としては使用できないものが多い¹⁷⁾。従って、インドネシア語およびムラユ語系民族語・ムラユ語クレオール変種以外の民族語が衰退していきやすい状況がある。

次節では民族語の規模と地域的な偏りにより決定される威信の高さや活力(バイタリティ)の違いと、ムラユ語系クレオールやインドネシア標準変種・インドネシア語口語変種からの影響度について述べていく。

6. 民族語の規模とバイタリティ

6.1 規模の大きな民族語とインドネシア語の使用域

この第6.1節では100万人以上の話者を持ち書き言葉の伝統を持つ、ジャワ語、スンダ語、バリ語をとりあげ、それぞれの民族語振興や使用域の観察と、インドネシア語口語変種との使い分けについて説明する。

6.1.1 ジャワ語の状況

ジャワ語は8400万人程度の話者を持つ大言語である。9世紀以前にさかのぼる文字言語の伝統を持つ¹⁸⁾。パーリ語の影響を受けたジャワ文字は10世紀以降、文学やサンスクリットからの翻訳によく用いられるようになる。ジャワ語はKrama(クロモ)と呼ばれる敬体、Ngoko(ゴコ)と呼ばれる普通体、その中間的なMadya(マディヤ)体と、それらを組み合わせた複雑な敬語体系を持つ。ヒンドゥー・マタラム王国、イスラーム・マタラム王国などの宮廷で用いられていた言語であり、中部ジャワ(特にジョグジャカルタとソロの周辺)の地域変種が最も威信が高い変種とされている。話者の数と威信の高さからいって、衰退していくとは思えない変種である。

しかし、上記のようにスハルト体制下では民族色を出す活動は著しく制限され、民族語の振興にかかわる動きはあまり起こせなかった。例えば、「ジャワ文化の調査と発達のためのプロジェクト(Proyek Penelitian dan Pengembangan Kebudayaan Jawa)」は教育文化相のDaed Joesoefによって1982年に始められたもので、ジャワ文化を掘り起こしインドネシア文化の授業で用いることができるようにすることを目的としていたが、文科相の交代に伴い18か月で終了することになり「インドネシア学」の中でのみ取り扱われることが決定された(Quinn, 2012)。教育においては、「異なる教科(mata pelajaran terurai)」という科目名で公立学校においてジャワ文学などが教えられていたが、1975年にこの科目が選択になってからはジャワ語関係の教育が減衰することになった。

民族語の普及には困難な時代であったが、複数の小さな出版社、音楽テープ・CDの会社、いくつかのローカルなラジオ局と国のラジオ局RRI(Radio Republik Indonesia)に加え、国家の放送局ネットワークTVRI(Televisi Republik Indonesia)の一部の放送、2、3の大学において、ジャワ語の放送・研究・普及活動がなされていた。これは十数万以下の話者しか持たない少数言語においては考えられないことである。少数言語においては持続的に出版社や音楽関係の会社、ラジオ局を運営することが資金的に難しく、通常L変種しか持たないため大学などの教育機関で教授・研究の対象とすることが、その話者たちにとっても考えられないことだからである。

ジャワ語ジャーナリズムの出版に関してはジャワ語の読者は主に農村の財政的余裕のない人たちであって常に資金不足であり魅力に乏しいものにならざるを得なかった。しかしQuinn 2012によると同時期のインドネシア語よりも革新的で深く考察されたジャーナリズムが散見されたそうである¹⁹⁾。言語的にみると、ほぼYogya-Soloの方言(ともに歴史の古い都である中部ジョグジャカルタとソロ)が出版・放送で用いられている。

これは中部ジャワに長らく都がおかれておりH変種の要素、特に書き言葉と敬語体系がしっかりしていたこともあるだろうが、オランダ植民地時代の1832年に「スラカルタのジャワ語研究所(Het Instituut voor de Javaansch Taal te Soerakarta)」(スラカルタとはジャワ中部ソロのこと)がおかれてジャワ語やジャワ文化の研究者は中部ジャワを拠点にしたことが大きく影響している(Quinn 同上)。ジャワ語は中部・東部ジャワで話されている大言語であり、地域方言の変異も豊かであるが、Yogya-Soloの方言以外はほとんど顧みられてこなかった。スハルト体制以降、ジャワ語の各方言による放送や出版が徐々に増えてきており、Yogya-Solo以外の方言も認められるようになってきている。Using方言(ジャワ島

東端、Banyuwangi 県)、Suroboyo'an と呼ばれる Surabaya 方言 (東部ジャワ)、Banyumas 方言 (中部ジャワ西端)、Tegal 方言 (中部ジャワ) などの方言による文学が書かれるようになったりラジオ放送が始まったりしている。

中部ジャワでは基本的に krama (クロモ、敬体、敬語を使用) を用いるのに対し、スラバヤの放送局 Pojok Kampung (インドネシア語で「村のセンター」の意味) は ngoko (ゴコ、普通体、敬語を使用しない) のみで放送しており、スラバヤという東部都市のアイデンティティ醸成の一因となっている (Quinn 同上)。Jogja TV では一日三回のジャワ語 Yogya-Solo 方言でのニュース番組を放送したり、音楽番組を放送しているが、これらに加え、Banyumas 方言での週一回の番組も放送している (Quinn 同上)。

またインドネシア語によるメディアに、ジャワ語のコラムや付録が見られるようになっている。例えば Harian Jogja というジョグジャカルタのインドネシア語新聞には週に一度 Jagad Jawa (ジャワの世界) という一ページの付録が付き、そこでは影絵芝居や伝統的なジャワ語の詩、短編小説、人生相談などがジャワ語で書かれている。

教育に関しても、スハルト体制末期の 1994 年に「地方科目 (muatan local)」が設定されて以降、週に二時間のこの時間を用いてジャワ語の授業が行われるようになった²⁰⁾。8400 万人という話者人口に加えて、文学・マスメディア・教育の各分野での使用がされていることから、ジャワ語が消滅するとは思えない。

公的な場面でインドネシア語標準変種およびインドネシア語口語変種が用いられるが、より私的な場面ではムラユ語クレオール変種に分類されるジャカルタ方言の影響が強く、またジャワ語が多く混じった変種を話すこともある。しかし、同世代のジャワ人同士で会話をするならば多くの場合、ジャワ語の ngoko 体が選択される。私的な場面で口語を用いるときに多くジャワ語が選択されるということからも、ジャワ語の健全さがみとめられる。

ただし、懸念は二つある。一つ目の懸念は各地の地域方言が軽視され、次第に使用されなくなっていくことである。都市地域のいくつかの方言は前述のように放送で使用されているが、放送局や新聞などのメディアがおかれていない地域の方言はより主要な方言 (特に Yogya-Solo 方言) に吸収されていく可能性がある。二つ目の懸念は krama 体が重要視されることが、若年層のジャワ語使用を妨げていくという可能性である。ジャワ語の、特に高学歴の話者には、威信の高い変種への強力なこだわりがある。Yogya-Solo の地域の方言が威信が高いことは述べたが、それに加えて敬語体系を使いこなす krama 体を使用することが重要とされている。ジャワ語能力の高い高齢者と若年層が話すとき、当然若年層側に krama 体の使用が要求される²¹⁾。この krama 体の使用に間違いがあるときには注意されることもあるので、krama 体の使用に自信が持てないという理由でジャワ人の年上の人との会話にジャワ語でなくインドネシア語を選択することも多い (レストリ 2010)。特に krama inggil と呼ばれる一番丁寧な krama 体は若年層が流暢に話せなくなっている (Quinn 2012)。またインドネシア語の借用語がジャワ語の会話にも多く使用されておりジャワ語の純粋性が失われているという観察もある (Quinn 同上)。

ただし、農村地域の方言が廃れることや、敬語の使用における変化や借用語の増加はどの言語でも観察される現象であり、特に言語を消滅に導く要因ではない。ジャワ語のほとんどの話者はインドネシア語とジャワ語の二言語使用者であり、H 変種としてインドネシア語

を使用し、L変種としてngoko体のジャワ語を使用するのが標準的な使用になっていくだろう。ジャワ語のkrama体は使用範囲が狭まるかもしれないが、これからも儀式的な場面や、伝統的な文学や文芸の分野で使用されていくだろう。

ジャワ語文学の創作、放送における使用、教育機関での教授などの要素は、ジャワ語の存続を保証する要素であると考えられる。また、ジャワ語による影絵芝居(wayang kulit)²²⁾のような大衆演芸は近年の経済発展に伴ってますます上演の機会が増えているということである²³⁾。ジャワ語はインドネシア語の影響を大きく受けながら変化していくだろうが、消滅することは相当長い間考えられない。(Quinn 2012)においてもジャワ語の明るい未来が示唆されている。

6.1.2 スンダ語の状況

スンダ語はジャワ島の西部で話されている言語である。首都ジャカルタと教育機関があつまるバンドゥン会議で有名な都市バンドゥンはスンダ語地域に存在している。3300万人の話者を擁する大言語であるが、ジャワ語地域と地続きであり、ジャワ語とはまた異なる様相を呈する。

スンダ語は7世紀から16世紀にかけてジャワ島西部に存在したヒンドゥー王国で使用されていた言語で、その文字の歴史も古く5世紀から19世紀にかけて6種類もの文字体系が使用されてきた。古くはインド系の文字を修正して使用し、その後ジャワ文字を採用したりアラビア文字を修正して使用したりした。現在はローマ字を用いることが一般的である。

首都ジャカルタがスンダ語地域であるため、Batawiと呼ばれるジャカルタのムラユ語クレオール変種や、その特徴をとどめている現在のインドネシア語ジャカルタ口語変種にはスンダ語の影響がある。第2節で触れたジャボデタベック(現在のジャカルタとその周辺都市群)にはインドネシア全国から様々な民族が流入し、異なる民族間の通婚がよくあるため、その子供たちは両親の民族語は習得せず、家庭内でも公的な場面でもインドネシア語を使用する単一言語話者となる(家庭内ではL変種たる口語変種、公的な場面では標準変種)。多くの大学や教育機関が集中するバンドゥンは、19世紀以降スンダ人にとって文化的、政治的な中心と考えられてきたのであるが、ジャカルタ同様、インドネシア各地から教育機会を求めて様々な民族の学生が集まるため、共通語はインドネシア語となり、ジャカルタ口語変種に近いものが私的な場面で使用される。従ってジャワ語地域よりも、言語の純粋性を保ちにくい状況となっている。

スンダ語教育は、1968年の段階では教授言語として3年生まで使用され、小学校(当時の義務教育)6年間で840時間行われていたが、その後1975年のカリキュラム改定により、民族語の時間がカリキュラムから削除された。それでもスンダ語の時間は時間外に一週間2時間程度設けられ、2年生までは教授言語として使用することが認められた。1986年からはスンダ語の使用が減少することに対する危機感から中学校でもスンダ語を教えることが認められた(Suryalaga 1986)。スハルト体制が終わってからも2003年の「地方独自内容」の教授が認められたり、2006年から高校生レベルまでスンダ語を科目として教えてよいことになったりと、スンダ語を子供たちに身に付けさせるための教育課程が組まれてきている。また、16世紀から18世紀半ばまで使用されていたKaganga文字と呼ばれたりスンダ文字と

呼ばれたりするスンダ独自の文字体系を保存することも2003年の州条例で決められた。この文字体系を読める研究者は非常に限られており、この文字体系と同時期からジャワ文字やアラビア文字の使用がおこなわれ、現在はローマ字が使用されている現状では、多くのスンダ話者がKaganga文字を使用できるようにすることはまず不可能である(森山2009)。これは非現実的といえるほどの目標を掲げても、民族語を大切にし、民族の誇りにしたいというスンダ話者の意識の表れである。

現在でも、他民族の流入の少ない町や農村部では、子供たちの第一言語はスンダ語であり、小学校3年生くらいまではインドネシア語の使用がおぼつかない。伝統的なイスラーム教育施設(pesantrenなど)では、アラビア語に加えてアラビア文字で記されたスンダ語の教科書とローマ字のインドネシア語の教科書を用いて教育がなされているのでイスラームの布教言語はスンダ語といえる(森山 同上)。

スンダ語はジャワ語同様、複雑な敬語体系を持つため、若年層が高齢者に対して使用をさける傾向にある。しかし、常体のスンダ語は親しみを表す言葉であり、多くの話者にとって第一言語であり続けている。

メディアにおいても、スンダ語の使用が拡大されてきている。スハルト政権時代には芸能や文化的な番組にかぎってスンダ語を使う番組が放送されてきたが、2000年以降、トークショー、バラエティー番組、ニュース番組の一部がテレビ放送されるようになった。2006年には10のスンダ語の定期刊行物が発行されていた(Purba 2005)が、そのブームが落ち着いたからでも週刊誌のKoran Sunda(スンダ新聞)や、その他のいくつかの週刊誌、月刊誌二誌が発行されている(森山 2009)。6.1節で述べたジャワ語の発行物と比べても突出した発行物の量である。

その他、スンダ文化国際会議(Konferensi Internasional Budaya Sunda)が開かれたり、スンダ語会議(Kongres Basa Sunda)が5年ごとに開催されるなど、組織的に多くの話者がスンダ文化とスンダ語の保全に力を尽くしている。スンダの伝統音楽も教育に取り入れられるようになってきている(森山 同上)。

スンダ語の定期刊行物や文学の発行点数が二倍以上の話者を持つジャワ語よりも多く、組織的なスンダ語振興活動に多くの話者が主体的に参加するには、スンダ語のおかれている状況がかかわっているだろう。ジャワ語の圧力を常に感じる上に、もともとのスンダ語地域に大きなインドネシア語単一言語地帯を含んでいることが、スンダ語を積極的に保全しなければ使用が減少していくという危機感を生んでいるのであろう。

3300万人という話者数に加え、話者自身がスンダ語による教育や刊行物発行、文学や芸能の振興に熱心な状況を考えると、スンダ語は相当長い間、存続していくことは明らかである。

6.1.3 バリ語の状況

バリ語はバリ島で主に話されている言語である。ジャワ語やスンダ語よりは圧倒的に少ない話者ではあるがそれでも300万人を超える話者を持つ大言語である。バリ島は観光地として有名で外国人観光客が多く、ジャワ人などインドネシアの他の地域からの流入者も多いため、開かれた地域のようにも思われるが、バリ人の社会としては宗教を核にした伝統儀式が

多く、非常に閉鎖的なところがある。

バリ島は古くからインド文化の波を受けてきたが、14世紀にジャワのヒンドゥー教国であるマジャパヒト王国がバリの王家を破り、バリを支配した。Kawi文字の導入もこのころ以降である。その後、ジャワ島においてマジャパヒト王国がイスラーム勢力に敗れたときに多くのヒンドゥー教のジャワ人貴族が逃げてきた場所でもあり、バリ島独自のヒンドゥー文化が色濃く残っている。このヒンドゥー文化とバリ語は切り離されない関係にあり、宗教儀式には必ずバリ語が使用され、中核となる部分では若年層が容易に理解できない古いバリ語が使用される。バリ語にも複雑な敬語体系があり、ジャワ語やスダ語と同様、若年層がバリ語の使用をためらう理由の一つに適切な敬語の使用に自信がないことが挙げられる。また、ジャワ地域と同様、階級社会の名残があり、平民出身の上司と貴族出身の部下などの場合に、伝統的な階級の上下によって敬語を選択するか、職業上の上下によって敬語を選択するのか、葛藤が生じてくる。このような場合、インドネシア語を主に使い、互いに敬意を表すジャワ語の小辞などを使用して面倒を避けつつ丁寧さを示すなどの戦略がとられることがある(原 2009)。

バリ語話者は300万人を超えると考えられているが、バリ語の使用に関しては地域差が大きい。州都のデンパサルや観光産業にはインドネシア各地からの流入者が多くいる。また、農村地域でも経済力を持ったバリ人が農作業を外部からの流入者(ほとんどがジャワ人)を雇用して行わせていることもよく見られるようになってきた(筆者による現地調査)。従ってインドネシア語とバリ語の併用地域が存在する。

バリ語とインドネシア語口語変種の使い分けは、生活環境に大きく左右される。ほぼバリ人しか住んでいない地域では家庭でも、学校や市場での会話もほぼバリ語が話されるのに対し、外部からの流入者が多い地域ではインドネシア語口語変種の使用域が増え、バリ人夫妻の家庭においてもインドネシア語が使用されることが多くなる。(鏡味 2009)によると、バリ島の小中学生におけるバリ語とインドネシア語(主に口語変種)の使用域は次のようにまとめられる(以下、内海による要約)。

- (1) バリ人が9割を超える地域では家庭でも学校の友達同士でもバリ語を使用する。
- (2) クラスの中のバリ人以外の割合が1割を超えると友達同士でインドネシア語を使用し始める。
- (3) 両親との会話では、生活地域におけるバリ人以外の割合が3割程度まで、家庭でもバリ語を話す小学生が多いのに対し、中学生になるとインドネシア語を使用する割合が増える。
- (4) 両親がともにバリ人でもバリ以外で生まれた子供は家庭でインドネシア語を使用する傾向が強い。
- (5) 片親がバリ人以外の場合は、家庭でインドネシア語を使用することが多い。

このバリ語地域における考察は、他の民族語が話されている地域に関しても推察する大きな手掛かりを与えてくれる。他地域からの流入者が1割を超えるだけで、小中学校での友達同士の会話はインドネシア語が優勢になるのである。また、3割を超えると同じ民族の夫婦の家庭であってもインドネシア語を話す割合が増えてくる。民族混住が進むインドネシアに

において、この知見は重要である。

バリ語の文学の保全やバリ語による公立学校の教育は行われているが、どの程度言語保全に役立っているかは不明である。ただし、宗教儀式を核とした社会形成がされている地域で、バリ語がその儀式に欠かせないものであるとすると、バリ語の威信の高い変種は存続するであろう。また威信の低いバリ語の変種は、外部流入者の極端に少ない地域で近所や市場、小中学校、家庭、といったある程度公的な場やごく私的な場で使用され続けるであろう。バリ島における観光産業の隆盛が、観光資源としての民族芸能（主にバリ・ガムラン音楽とバリ舞踊）の経済的価値を高めている現状では、民族芸能と切り離せないバリ語の使用も話者から重視され続けるだろう。インドネシア語口語変種の使用が主になっているバリ人たちにとっても、二言語使用が理想とされていくことは想像に難くない。

6.2 十数万以上の話者を持つ民族語の場合

本節では、中位程度の言語として30万人の話者を持つスンバワ語と100万人の話者を持つジャンビ語を取り上げ、言語使用の状況を示す。一つの地域に集住し、話者も多く、活力に満ちているこれらの言語は、現時点では言語使用者の減少はそれほど心配されないが、将来を考えるとあまり楽観視もできない。

6.2.1 スンバワ語の状況

スンバワ語は30万人以上の話者を持つと推定されている²⁴⁾。スンバワ島は西トウガラ諸島に存在する島で、その西半分の多くの地域で話されている。方言差は大きく、四つの変種に分けられるとされるが、互に通じないと報告されている（塩原 2009）。スンバワ島の東部ではビマ語が話されているし、海を挟んで位置するロンボク島ではササク語が話されている、多言語地域に存在している。この地域で異なる言語の話者同士が意思疎通をするにはインドネシア語口語変種（教育程度の高い層および公的な場）およびムラユ語クレオール変種が用いられる。

農村部ではほとんどスンバワ語話者で生活域が占められているが、スンバワ・ブサルという中心都市ではインドネシア語口語変種が公的な場で用いられ、格式張らない場ではムラユ語クレオール変種が話されている。ほとんどイスラームを信仰している地域で、モスクでの説教や結婚の誓い、冠婚葬祭などの宗教儀式においてはインドネシア語標準変種に準じたインドネシア語口語変種が用いられる（塩原 2009、私信）。高校以上の教育、特に大学教育を受けているような階級の人々はインドネシア語の方を主に使用することが多くなる。これらの人々は、例えば、教員、警察官、役所の職員などになることが多く、そのためにはインドネシア語標準変種の高い能力が求められるので、その習得に真剣になる。この階級のスンバワ人同士の家庭でも、インドネシア語口語変種あるいはムラユ語クレオール変種を意図的に使用し、子供のインドネシア語能力を高めようと試みることがある。

第6.1節で扱ったジャワ語、スンダ語、バリ語には、書記言語体系と敬語体系を含むH変種が存在しているが、スンバワ語にはそのような変種がないと認識され、公的教育や宗教儀式ではインドネシア語を用いる。新聞などのメディアでもほぼスンバワ語は用いられず、振興運動も盛んでない。スハルト体制崩壊後は地方分権化の流れにのって、スンバワ語を小

学校等の教育機関で教えることも検討されたが、ローマ字による正書法がなく（8母音の書き分けが決まっていない）、規範的な変種がない上にスンバワ語の方言差が大きく、どの地域変種を主体に教えるかが決まっていない（塩原 2009）。

つまり、スンバワ語はL変種しか持っていないため、多くの人はスンバワ語を価値がないものと考えている。教育にたずさわる層は特に威信が高いインドネシア語を教育すべきだとの考えが強く、上記のように教育機関で教える話が出ていても具体化しない。スンバワ人はスンバワ島西半分に集住しているため、スンバワ語が私的な場面の多くで用いられているので、スンバワ語が消滅に向かっていないと考えない話者が多い。ただし今後は、インドネシア語を主体として用いる階級からスンバワ語の使用は減っていくだろう。農村部では今後もスンバワ語を第一言語として育つ世代が続くとしても、地域社会全体がスンバワ語を劣位の言語とみなし、インドネシア語の使用を重視していく状況が続くと、スンバワ語を第一言語としない子供たちが増加するだろう。生活地域に多くの言語が存在していることから、第一言語がムラユ語クレオール変種にとって代わりL変種として機能するようになり、H変種がインドネシア語という状態になって、民族語がどの使用域でも用いられず衰退していくことも考えられる。

現時点では子供にも伝承されており消滅の危機に瀕しているとは考えられていない。SILの評価でも6a、vigorous（活力がある）とされている。しかし、30年後、50年後には子供たちに伝えられない状況が現れてもおかしくない、基盤の不安定な言語である。

6.2.2 ムラユ語系民族語の状況

ここではムラユ語系民族語の例として、ジャンピ語を取り上げる。Jambi Malayともいわれるように、明らかにムラユ語系であり、かつ長年にわたってジャンピと呼ばれる人々によって話されてきた民族語である。話者は100万人程度である²⁵⁾

ジャンピ市はスマトラ島中央部の東岸に位置している、ジャンピ州の州都である。ここはシュリーヴィジャヤ王朝時代に貿易港として栄えた。スマトラ島にはムラユ語系民族語が広く分布しているが、ジャンピは貿易拠点であったため、通商用語としてのムラユ語の側面もあったと考えられる。

現時点でのジャンピ語はインドネシア標準変種とは音声・音韻・語彙をはじめ多くの点で異なっている。ジャンピ語にはH変種は存在しないと考えられており教育機関や宗教儀式（イスラーム）における使用言語はインドネシア標準変種（あるいはそれに近いインドネシア語口語変種）である。しかし日常会話や近隣の市場での買い物など私的な場面では圧倒的にL変種たるジャンピ語を用いている。（Ferguson 1954）にあるような典型的なダイグロシア（二言語併用状態）である。

このジャンピ語の使用と言語意識に関する調査（Anderbeck 2010）によると、ジャンピ語話者のジャンピ語に対する意識は好意的で、民族の言語として誇りに思い、子供たちにも使用してもらいたいと考える者が多い。口承文学や芸能の分野ではジャンピ語が伝承されている。話者も100万を超える。しかし、公的な場面ではジャンピ語は使用されず、私的な場面でも徐々にジャンピ語の使用が減り、インドネシア語口語変種の使用が増えていることが観察されている。高学歴の層と若年層でインドネシア語口語変種の使用が増えていることは、

ジャンビ語の存続にとって懸念材料である。

ジャンビ市周辺には他のムラユ語系民族語も存在しているが、ジャンビ語は地域共通語として、他のムラユ語系民族語の話者にも使用されている活力のある言語である。ジャンビ人がジャンビ市と周辺の農村に集住していることから、ジャンビ語の活力が容易に失われるとは思われない。また、高学歴層も、L変種であるジャンビ語を劣った変種とみなしていたにもかかわらず、民族語の伝統であり好ましい変種であると高く評価している（Anderbeck 同上）。

しかし、社会言語学的な調査結果（Anderbeck 同上）を見ると、あまり楽観視もできないのである。ジャンビ語はムラユ語系民族語なので、インドネシア語と言語的に近く、ジャンビ語話者はインドネシア語を容易に習得する。今後はインドネシア語口語変種の使用が増加していき、L変種の使用としてもジャンビ語に置き換わることが考えられる。同系統の言語ということで話者自身にあまり意識されないゆるやかな標準語化が起こるのではないだろうか。H変種として使用されないために教育機関でジャンビ語を教えるといった、振興策がとられないこともジャンビ語の未来を危うくしている。

ジャンビ語に限らず、ムラユ語系民族語は口承文学や芸能の分野で伝承されていき、L変種としてもある程度の使用が続いていくだろう。しかし、伝統的な民族語の形は、インドネシア語標準変種の影響を受けて徐々に変化していき、ついには日常生活のレベルでもインドネシア語口語変種にとってかわられる可能性も高い。そして、この変化は同系統内での変化であるために、話者自身にも意識されにくいものとなるだろう。実際に、ジャンビ語がインドネシア語標準変種に近づいていることは報告されている（Yanti 2010）。

ジャンビ以外の周辺のムラユ語系民族語にはクリンチ（Kerinci）、クブ（Kubu）、レンブルマレー（Lempur Malay）、ランタウ・パンジャン・マレー（Rantau Panjang Malay）などがある。これらの言語はジャンビ語より危機的な状況であろう。市中心部ではジャンビ語が一番活力を持っているため、民族語の使用可能域は狭い。従って、民族語を伝承するよりもジャンビ語を使う親や（類似の例は第6.3節に示す）、インドネシア語口語変種を子供たちに伝えようとする高学歴の親が増える可能性は高い。

6.3 少数民族言語が生活地域に多数存在している場合

本節では話者数万人程度の少数の話者しか持たない民族語が、生活地域に多数存在している場合に見られる状況をまとめる。話者が数万人までの言語の話者たちは、自給自足の性格の強かった過去においては民族ごとに固まって住み、同民族で通婚することが多かった。結婚などを機会に入ってきた他民族は、新天地の民族語を習得して暮らし、他民族間の婚姻によって生まれた子どもも、育った土地の民族語（両親のどちらかの言語）を第一言語として獲得していた。

20世紀後半より、教育機会や経済機会を求めて人々が広範囲に移動するようになり、特に21世紀に入ってからは、その言語の話者が居住する範囲だけで生活していくことはできない。隣り合った言語の話者たちとも日常的に接する生活を送っている。従って、少数民族語が生活域に多数話されていると、異なる言語の話者が共通して話す地域共通語が必要となる。この地域共通語に選ばれる言語は、一番勢力の強い民族語の場合もあるし（6.3.1節）、

ムラユ語クレオール変種（6.3.2、6.3.3節）の場合もある。以下に三つの地域の状況を述べる。

6.3.1 カハヤン川流域：カドリ語とガジュ語の状況

カドリ語（Bahasa Kadorih）は中カリマンタン州の北部、カハヤン川（Kahayan）の源流から中流にかけて話されており、話者は2万5000人を下回ると考えられる（稲垣 2008）。カハヤン川の流域には別の民族語、ガジュ語（Bahasa Ngaju）を母語とするグループとカドリ語を母語とするグループが共存している（稲垣 同上）。

このような状況では、地域共通語が必要となる。カハヤン川沿いではガジュ語の方が威信が高い言語であり、地域共通語としても用いられる。カドリ語話者の中に少数のガジュ語話者が混じっている場合の使用言語はガジュ語となる。小中学校では、教師がカドリ語話者であってもインドネシア語口語変種かガジュ語を用いて授業が行われる。カドリ語話者とガジュ語話者が結婚した場合もガジュ語が家庭内の共通語となり、子供たちはガジュ語を第一言語として育つ。ヒンドゥー教の一派とされるカハリンガン（Hindu-Kaharingan）が伝統的な宗教だが、若年層にはキリスト教徒が多い。遺体の安置法や葬送の儀式はカハリンガンのしきたりで行われるがその際の使用言語もガジュ語である。キリスト教の集会ではインドネシア語標準変種が用いられる。カドリ語にはもともと文字がないが、ローマ字の正書法も制定されておらず、手紙などではガジュ語、公式文書ではインドネシア語標準変種が用いられる。ガジュ語とインドネシア語からの借用語がカドリ語に入り込んでいる。一応、丁寧さを伝える語彙と普通の語彙の違いを意識しているものの、敬語体系が存在しているわけではなく、H変種として確立した変種はない。ガジュ語が儀式などでも用いられH変種としての機能もあるのに対してカドリ語はL変種としての機能しかない（稲垣 2008）。

カドリ語地域でも収入の安定している高学歴の人々が求める職業にはインドネシア語標準変種の能力が必要であり、地域共通語はガジュ語である。このような状況を考えると、カドリ語の将来はまことに暗いと言わざるを得ない。あと数十年、つまり今の子供たちが高齢になるころには、カドリ語がほとんど話されていない状況になることも考えられる。

地域共通語のガジュ語の方であるが、現在のところL変種の地域共通語として活力があり89万人の話者がいるとされている。H変種として儀式で使用される領域もある。地域共通語としての地位が確立しているのでこれからもある程度は受け継がれていくであろう。

第6.2.2節でみたムラユ語系民族語のジャンビ語とガジュ語は、状況が異なる。ジャンビ語はインドネシア語と近すぎるために、インドネシア語標準変種に近づいていき別個の言語ではなく地域方言のように変化していく可能性がある。しかしガジュ語は西バリト語派に属し、ムラユ語とは距離のある言語である。このような言語が89万人の話者を持ち地域共通語として他民族にも用いられる場合、これから相当長い期間にわたって使い続けられると考えられる。

6.3.2 北スラウェシ州の状況：11の少数民族言語が存在し他民族の流入も激しい地域

北スラウェシ州は北スラウェシ半島あるいはミナハサ半島に位置する。240万人の人口を持ち、プロテスタントが63%、カトリックが6%でイスラームが28%、その他仏教などで、

オランダ支配の強い影響を受けているためもとの北スラウェシ出身者はほとんどがキリスト教徒である。イスラームは少数の地元出身者もいるが大多数が他地域（西隣のゴロンタロ州か南スラウェシ）からの流入者である。この州には11の少数民族言語が存在する。これらの話者は多くても7万人程度、少ないと1万人程度である。このうち、筆者が調査を行ったバンティック語 (Bahasa Bantik) とタラウド語 (Bahasa Talaud)、そして地域共通語のマナド・マレーの言語使用域と将来について述べたい。

北スラウェシ州の州都はマナド市である。マナドは港湾都市であり、通商の拠点であった。古くは9世紀ごろから中国、15世紀以降は中東やヨーロッパからたくさんの商人が立ち寄る場所であり、通商用語として発達したムラユ語クレオール変種の一つ、マナド・マレー (Melayu Manado)²⁶⁾ が話されている。マナド・マレーはインドネシアの公教育のシステムが発達するにしたがって話者を獲得していき、現在では北スラウェシ半島だけではなく、西隣のゴロンタロ州や北スラウェシ州の離島地域（後述のタラウド語やサギル語など）にも話者が増えている。マナド市の人口は40万人を超えるが、マナド出身者はほぼマナド・マレーを第一言語として育っている。マナド市から車で一時間程度の高原の学園都市、トモホン市はもともとトンプル語 (Bahasa Tombulu) の地域であったのにもかかわらず、マナド・マレーが共通語として用いられるようになった。多くの異なる民族が教育機会を求めて集まるため、すべての民族が習得しやすいマナド・マレーが選ばれる。トモホン市で生まれ育った人々もほとんどマナド・マレーを第一言語としている。マナド・マレーはL変種であり、宗教儀式（北スラウェシ州の民族はほとんどがプロテスタントでごく少数がイスラーム）においてはインドネシア語標準変種とインドネシア語口語変種を用いる。マナド・マレーには正書法はないが、スハルト体制崩壊後は多くのマナド・マレーの歌がビデオCD、CDが発行されるようになり、その歌詞カードはマナド・マレーを書いたものとなる。Facebookなどのソーシャルメディアで同郷の人々とのコミュニケーションにはマナド・マレーをローマ字で書いたものがほとんどで、インドネシア語標準変種が用いられるのは公式発表（冠婚葬祭や研究大会のお知らせなど）かキリスト教にかかわりのあるコメントの場合が多い。

マナド・マレーは元々劣った変種であると認識されてきたが、多くの人々の第一言語となり、北スラウェシ出身者のアイデンティティのよりどころとしての地位を獲得してきた。その地位は書き言葉として用いられ、マナド・マレーの歌が多数発表されたりすることに表れている。マナド・マレーの広がり第一言語として選択される割合の増加は、インドネシア語標準変種がH変種として確立したことと当然関係している。教育・放送・出版物・宗教儀式などの公的場面でインドネシア語が用いられるので、距離の遠い民族語よりも同じ系統のマナド・マレーの方が私的場面でも用いやすくなる。それに加えて同じ生活域に多くの民族が住んでいるため、他民族とのコミュニケーションの言語が必要で、それには誰にとってもなじみのあるマナド・マレーが一番良いからである。スハルト体制崩壊後の地方自治の流れにともない、民族意識も高揚しているが、マナドやトモホンなどの人口の多い地域は流入者が多いため、ある特定の民族のアイデンティティはない。代わりにマナド・マレーを話すミナハサ人、というアイデンティティが育っている (Utsumi 2012)。そのためマナド・マレーのスローガンや広告が街中に増え、マナド・マレーが新聞の小さなコラムなどに使用されることが増えてきた。

このようにますます活力を増すマナド・マレーにと比較して、ムラユ語系とは異なるフィリピン諸語に属する北スラウェシ州の民族語の状況は悲観的なものである。

北スラウェシ州の民族語の一つ、バンティック語は Noorduyn 1991 には1万人程度の話者がいると記されているが、Utsumi 2012 などに記した筆者自身の観察によれば1980年代以降に生まれたバンティック人はほとんどバンティック語を話さず、1960年代以降に生まれたものは受動的話者（流暢には話せないが話しかけられればほぼ理解する）がほとんどであるため、話者数は少なければ3000人、多くても6000人程度と推察される。バンティック人の居住地域は、北スラウェシ州の州都、マナド市の近隣地域で通勤に便利な場所である。1970年代より徐々に、1990年代より急速に住宅地として開発されて他民族との混住状態になった。バンティック人同士の婚姻の割合は1980年代には既に半分以下であり、2010年代になると1割か2割になっている。1980年代にはすでにバンティック人と非バンティック人が結婚した場合は家庭内でマナド・マレーが第一言語として子供たちに獲得されている。親世代にどんな言語を子供に一番習得してほしいかを問うと、インドネシア語標準変種という答えが圧倒的に多く、たまに英語という答えが出てくる。マナド・マレーは自然に獲得されているので、意識的に習得されるべき言語としては認識されていない。そのような状況でもなぜかバンティック語話者はバンティック語が継続して用いられると信じており、子供たちへの積極的な教育を行おうとはしない。小中学校で教育しようにも、すでに他民族が多数住んでいるのでバンティック語のみを教えることが合理的でなく、バンティック語を教える能力のある高齢者には高等教育を受けたものが少なく、高学歴でないと公立の学校で教えられない規則があるので、適切な教師を呼ぶことができない (Utsumi 2012)。

マナドの港から200キロほど北上したところに位置するタラウド諸島で話されているタラウド語も似たような状況である。マナド市の近郊に住んでいるバンティック人と異なり、タラウド人は遠く離れた諸島に住んでいるし、他民族の流入はバンティック語地域に比べて著しく低い。それなのに、小中学校の休み時間や若年層（1980年代以降出生のもの）の私的な場面で用いる言語はマナド・マレーである。宗教儀式（キリスト教プロテスタント）にはインドネシア語標準変種が用いられている。ただし、冠婚葬祭や地鎮祭、進水式などの儀式では伝統的な祝詞のような定まった形式のタラウド語のスピーチが行われてきたため、2010年代においても伝統的な儀式が好まれる。このような儀式にはキリスト教関連のインドネシア語標準変種によるスピーチが付随することが多い。タラウド語の伝統的なスピーチができる人は大抵1950年以前に出生しており高齢化が著しく、特に若い世代に伝えられていないので、あと二十年ほどでタラウド語のスピーチが儀式から姿を消す可能性が高い。

高齢層（主に1950年以前に出生のもの）のうち学歴が高い（高校卒業以上）のものは、インドネシア語標準変種の能力は高いが、マナド・マレーの知識は少なく、タラウド語能力が高い。この層においては公的な場面のH変種はインドネシア語口語変種、伝統的な儀式でのH変種はタラウド語とインドネシア語口語変種で、私的な場面のL変種はタラウド語であった（内海 2009）。

しかし、1970年代以降に出生したタラウド人はH変種としてインドネシア語標準変種、L変種としてマナド・マレーを使い分けている。大学や専門学校は北スラウェシ半島のトモ

ホン市やマナド市の機関に下宿して通うことも多い。仕事の機会を求めてマナド市に移住するものも多い。ほとんどのタラウド人はタラウド諸島と北スラウェシ半島の都市を行ったり来たりして、年に1回か2回帰郷している。このように頻繁な行き来をしているため、多くのタラウド人がマナド・マレーを用いて他民族とコミュニケーションをとることが当然となっている。

話者のタラウド語に対するイメージは良いもので、民族の言語だから伝えていきたいと高い価値を感じているものの、子供たちに組織的に伝えようとはしていない。バンティック語よりは他民族の流入が少ない居住地なので、小中学校で教えても良いのだが、「地方科目」の授業では言語そのものでなく、伝統芸能などの文化を教えたり外国語などタラウド諸島と関係ないものを教えたりしている。子ども達のタラウド語能力についても、質問すると「みんなしゃべってる」と答えるものの、「このごろは若い者が民族語を話さない」などと言う。40代の受動的話者が話す高齢者は間違いを指摘することもある。筆者の観察によると、タラウド語の十分な能力がありそうな50代の話者が70代の話者と話すとき、日常的な題材についての会話は十分にタラウド語で行われているが、複雑な話題（政治に関わる問題や地方自治についての話）になると、50代の話者がインドネシア語口語変種にシフトし、70代の話者はタラウド語を主体にところどころインドネシア語からの借用語を交えて話し続けるということがあった。複雑で高度な内容になると、1960年代生まれはインドネシア語でしか見たり聞いたりしていないので、タラウド語だけで話すことは難しいのである。祖父世代以上のタラウド人は実際には単語レベルあるいは日常生活のフレーズレベルの表現しかできない若年層を「タラウド語を話している」と認識して安心しているところもある。

他の北スラウェシ州の民族語をみても、地域共通語として使われているものはなく、マナド・マレーのみが地域共通語であり、同じ民族で固まって住んでいる村でも1980年代以降に出生の若年層はマナド・マレーが第一言語となっている。北スラウェシ州の人々は他民族間の通婚が普通となり、教育と就職の機会を求めて広い地域を行き来しているので、マナド・マレーを家庭でも使うようになっている。民族語振興の運動も若干はあるものの、聖書の民族語訳²⁷⁾や民族語による賛美歌作成のレベルにとどまり、一番必要な子ども達への教授が行われていない。このような状況では、民族語は1950年以前に出生した人々を中心とする高齢層のみが流暢に話せるという状態が続き、2040年から2050年ごろには話者がいないという事態を招く可能性が高い。

6.3.3 東ヌサ・トゥンガラ州の状況

東ヌサ・トゥンガラ州は小スンダ列島の東部の556の島々からなり、主な島はフローレス (Flores) 島、スンバ (Sumba) 島、アロール (Alor) 諸島、ティモール (Timor) 島西部で、470万人程度の人口²⁸⁾を擁する。住民の58%程度がカトリック、36%程度がプロテスタントで、合わせて94%程度がキリスト教徒、イスラームは5%程度と、イスラーム主体のインドネシアでは珍しい宗教構成である。

このあたりの言語のうち、ムラユ語クレオール変種のクパン・マレー (Melayu Kupang、ティモール島近辺) やララントッカ・マレー (Melayu Larantuka、フローレス島近辺) が地域共通語として話されている。

アロール島（東ヌサ・トゥンガラ州アロール県）は、面積 1888 km²、人口 13 万人程度の小さな島であるが、12 の言語が話されている。アダン語（Bahasa Adang）の話者が 3 万人、アロール語（Bahasa Alor）が 2 万 5000 人、カマン語（Bahasa Kamang）とアブイ語（Bahasa Abui）が 1 万 6000 人程度の話者を持つが、あとは数千人以下の話者しか持たない。すべてが少数言語である。島の中心地や県都カラバヒでは地域の中で二番目に話者数が多く威信の高いアロール語が地域の共通語として用いられている（塩原 2009）。その周辺のクイ語、ハマップ語、カボラ語、アブイ語の話者は、自分たちの民族語を地域共通語として用いることはできない。H 変種はインドネシア語標準変種・口語変種であるが、L 変種の地域共通語としてはムラユ語クレオール変種の他にアロール語を用いる（塩原 同上）。

このうち 4000 人程度の話者を持つクイ語（Bahasa Kui）は、インフラが不十分で自給自足的なレライン、ブラガの両地域ではテレビもあまり見られず、インドネシア語が入り込んでいないため、第一言語として子供たちが獲得している言語である。しかし村には中学校までしかなく、高等教育を受ける場合には外に出ていくしかない。一方、話者の半数以上が居住しているインフラの整った県都近隣のモルでは他民族が入り混じって住んでいるため、クイ語の継承は行われておらず、第一言語としてムラユ語クレオール変種（ララントッカ・マレー）が用いられることになる。また、クイ人を含め他民族もアロール語もある程度話せるため、アロール人が多数を占める県都カラバヒではアロール語が共通語として用いられる。そこで育つとどの民族の子供でもアロール語の能力がある程度身につくが、それ以外の両親の民族語は継承しない（塩原 2009）。

民族語を継承していなければ、当然民族アイデンティティもあいまいになってくる。現在第一言語をムラユ語系クレオール変種として育った子供たちが家庭を持つ 20 年後ごろには、東ヌサ・トゥンガラという地域アイデンティティが民族アイデンティティに勝る人口が増えるだろう。そのような人々は広い地域を教育・就業機会を求めて移動する、比較的高学歴の層である。彼らは民族語を話す人々を文化的に遅れた人々だと認識し、民族語の保全について無頓着になる。

民族語振興策もとられておらず、他民族の混住・他民族間の通婚がすすむとムラユ語クレオール変種の L 変種としての使用が増える。また、経済発展にともなって高学歴を求め、高収入の職を求めるようになる H 変種としてインドネシア語標準変種の使用が増える。この地域で地域共通語としても用いられるアロール語はある程度長い期間安定して使用されるかもしれないが、それもムラユ語系クレオールにとってかわられるかもしれない。他の民族語に関しては、その話者の少なさと都市部での継承がなされていないことから、やはり 20 年後から 30 年後には深刻な消滅の危機を迎えるだろう。

7. 結論

インドネシアにおける民族語の状況を考えるとき、まずムラユ語系か非ムラユ語系かの区別をする必要があるようだ。ムラユ語系民族語は、6.2.2 で見たように、インドネシア語標準変種による標準語化を受けて、インドネシア語に近づいていく。ただし、地域方言が完全に消滅することはないので、伝統的な形ではないものの民族語の要素を残していくだろう。

非ムラユ語系民族語の場合、大きく三つに分けることができよう。第一に民族語の話者人口が300万人を超える大言語の場合、その民族の居住地域では地域共通語のL変種としてその言語が選ばれる。民族語にH変種も存在することが多く、書き言葉として用いられることもある。このような場合、民族語のL変種としての継承は確実になされる。インドネシア語の影響を受けて民族語は変質していくし、H変種がインドネシア語標準変種にとっかわられることはありえるが、消滅に向かうことは現段階では考えられない。

第二に、話者人口が十数万以上で、ある地域に集住している場合は、L変種としての使用がすぐになくなるわけではない。しかし、H変種として確立しておらず振興策もとられていない場合は、民族語ではなくムラユ語クレオール変種を家庭で獲得し、長じてインドネシア語口語変種に習熟していく子供たちが増えていく。経済発展と高学歴化にともなって農村部にもこの傾向は波及していく。今後数十年は民族語が継承されていくが、2050年以降になるとどうなっているかわからない。それまでに話者自身が選択する言語伝承のあり方によって決まる。民族意識を高め言語教育をしっかりと行っていけば、L変種として使用され続けるだろう。しかし、このまま何も策を講じなければ2050年ごろから話者が急激に減少し、今世紀中に消滅する可能性が高い。

第三に、話者人口が数万人以下の規模で、生活域に多くの民族語が話されている場合、地域共通語として使用されているかどうかは鍵となってくる。地域共通語として用いられない言語の場合は、2000年以降に出生した親の子供たちからその地域で使用されているムラユ語クレオール変種を第一言語として獲得するようになるだろう。都市部ではすでにほとんどがそうなっていて、流暢な話者は少なくとも1980年ごろまでに生まれているものに限られる。農村部ではこの変化がもう少し遅く起こるかもしれないが、2050年ごろまでに流暢な話者が激減し、2070年ごろまでに消滅するだろう。6.3.1でみたカドリ語、6.3.2でみたバンティック語やタラウド語、6.3.3でみたクイ語がこれにあてはまる。残念ながら、このような少数言語の具体的な振興策がとられている例は聞いたことがない。

6.3.1でみたガジュ語や6.3.3のアロール語のように地域共通語として使用される民族語の場合は、同じ民族語同士の家庭ではそれらの言語が継承されていくだろう。しかしムラユ語系クレオールへのL変種のシフトは緩やかに起こる。インドネシア語が国家語としてH変種の地位を確立している以上、それに似た言語が地域共通語としてより多く使用されるようになるからだ。しばらくは民族語の継承は続くが、やはり2050年以降に使用者激減の時代を迎える可能性がある。

他方、ムラユ語系クレオール変種はL変種としての使用をますます拡大していく。ムラユ語系民族語と同様に、徐々にインドネシア語標準変種の影響をうけ脱クレオール化ないし標準語化していきながらも、特徴をある程度残したまま勢力を強めていくはずだ。

インドネシア共和国が700もの民族語をかかえる領域にインドネシア語標準変種を統一国家語としていきわたらせることには完全な成功をおさめた。インドネシア語標準変種がH変種としての地位を確立しており、大学教育でも基本的な教授言語となり宗教儀式でも用いられるケースが増えている。これにともない、ムラユ語クレオール変種がL変種の地域共通語として、その地域の民族語を駆逐する形で勢力を増している。ムラユ語クレオール変種

はインドネシア語標準変種の影響を受け脱クレオール化ないし標準化していくが、地域的特徴をある程度残してますます活力を得、話者を増加していこう。ムラユ語系民族語もインドネシア語標準変種に近づき変化していくがある程度特徴を残した地域変種になるだろう。

上記の変化の陰で多くの非ムラユ語系民族語が消滅するという激的な結果を招くことになる。大多数を占める少数民族語は2050年ごろから激減し、今世紀中に消滅するだろう。ただし、注意しておかないといけないのは、この言語シフトが国家による強制ではなく、教育・就業機会を求めた人々の選択の結果であり、マスメディアによるインドネシア語との接触の結果であるということである。

多くの少数言語を継承することは言語の多様性と民族アイデンティティ醸成の観点からとても重要である。この2010年代終わりの時期が言語振興策をとって結果を残せる最後の時期である。インドネシアでも言語復興に関して理解が深まっているので、多くの少数言語話者が自主的に振興策をとるようになることを祈る。

参考文献

- Adelaar, Alexander. 2005. Structural diversity in the Malayic subgroup. In *Austronesian languages of Asia and Madagascar*. eds. by Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelmann. London-New York: Routledge.
- Anderbeck, Kristen Leigh. 2010. Language Use and Attitudes among Jambi Malays in Sumatra. SIL International.
- Andaya, Leonard Y. 2001. The Search for the 'Origins' of Melayu. *Journal of Southeast Asian Studies*, 32. pp 315-330. Singapore: The National University of Singapore.
- Erb, Maribeth, Priyambudi Sulistiyanto and Carole Faucher. 2005. Introduction: Entangled Politics in Post-Suharto Indonesia. In *Regionalism in Post-Suharto Indonesia*, ed. Maribeth Erb, Priyambudi Sulistiyanto and Carole Faucher. London-New York: Routledge Curzon, pp. 141-169.
- Ferguson, Charles A. [1959] (1964). "Diglossia", in Dell Hymes (ed.): *Language in Culture and Society*. New York: Harper & Row, pp. 429-39. (初出 Ferguson, Charles A. (1959). "Diglossia". *Word* 15 (2): pp. 325-40.)
- 舟田京子. 2006. 「インドネシア・マレーシアの両国独立後の言語協力に関する史的考察」. 早稲田大学博士論文.
- 原真由子. 2009. 「バリ語—インドネシア語コード混在と敬語使用の相互作用」. 『多言語社会インドネシア』 pp. 129-152. 森山幹弘、塩原朝子編著. 東京: めこん
- 稲垣和也. 2008. 「カドリ語—ボルネオ島のオーストロネシア系言語の記述—」. 京都大学博士論文.
- 鏡味治也. 2009. 「インドネシアの学校教育に見る国語と地方語」. 『多言語社会インドネシア』 pp. 97-120. 森山幹弘、塩原朝子編著. 東京: めこん
- Milner, Anthony. 2008. *The Malays*. West Sussex: Balckwell.
- 中原巧一朗. 2006. 「フィリピンの言語・社会状況と同国における英語とフィリピン語の将来」. 『自然・人間・社会—関東学院大学経済学部教養学会』第40号.

- Noorduyn, J. 1991. *A critical survey of studies on the languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.
- Purba, Dhipa Galuh. 2005. Menjelang Kematian Bahasa dan Sastra Sunda. in Punulislepas.com: kipah & komunitas penulis lepas di internet, 19 April 2005. URL: <http://www.pikiran-rakyat.com/cetak/2005/0605/29/0101.htm>. 閲覧日 2007 年 5 月.
- Quinn, George. 2012. Post-New Order Developments in Javanese Language and Literature. In *Words in Motion*. eds by Keith Foulcher, Mikihiro Moriyama and Manneke Budiman.
- Rusyana, Yus. 1982. Pembinaan Pengajaran Bahasa Sunda di Sekolah Dasar, in Yus Rusyana ed. *Pendalaman Bahan Pengajaran Bahasa Sunda di Sekolah Dasar/Editor Petunjuk Pelaksanaan Kurikulum Sekolah Dasar 1975 Garis-garis Besar Bidang Studi Bahasa Sunda*. pp.17-24. Bandung: Proyek Penataan kembali Pelaksanaan Pelajaran Bahasa Sunda, Dinas P dan K Propinsi. D. T. I Jawa Barat 1982/1983.
- 塩原朝子. 2009. 「インドネシア東部の少数言語コミュニティ」. 『多言語社会インドネシア』. pp 153-181.
- Sneddon, James N. 2003. *The Indonesian language: Its history and role in modern society*. New South Wales: University of New South Wales Press.
- Suryalaga, Hidayat, et al. 1986. *Gapura Basa, Pengajaran Basa Sunda, Pikeun Mrid SMTP Kelas Tilu*. Bandung: Geger Sunten.
- レスタリ, スリ・ブディ. 2010. 「ジャワ語の敬語に関する記述的研究：第三者敬語を中心に」東京外国語大学博士論文.
- Utsumi, Atsuko. 2012. Language Use and Attitudes to Language in Multilingual North Sulawesi: A Sociolinguistic Survey in the Bantik-Speaking Area. in *Words in Motion*. eds by Keith Foulcher, Mikihiro Moriyama and Manneke Budiman.
- 内海敦子. 2011. 「タラウド語使用地域の言語使用と言語意識：インドネシア国北スラウェシ州における民族語使用実態」. 『明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科』第 19 号.
- Yanti. 2010. *A Reference Grammar of Jambi Malay*. University of Delaware, Doctoral dissertation.

* 本論文は、2016 年 10 月 22 日に慶應大学言語文化研究所でおこなった公開講座、「インドネシアにおける国家語と民族語—700 もの言語が息づく島々の多言語状況—」を基に大幅に内容を追加しまとめたものである。公開講座への出講の機会を与えていただいた三上直光教授にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

注

- 1) インドのパッラウ王国の経典文字として用いられたものでグラントラ文字とも称される。基本的に音節ごとの表記をする。
- 2) フレドリッヒ・デ・ハウトマンの 1608 年のマレー・マダガスカル語辞書が初とされる。
- 3) ビジンは語彙に限られ、文法が簡略化した言語で、母語話者のいない言語である。従って、すべてのビジンの話者はある程度成長してから意識的に学習した非母語話者である。広範囲に用いられる通商用語は教育機関で正式に学ばれることはないため、ビジンの性格を色濃く持つことが多い。

- 4) 1511年、ポルトガルがマラッカ王国を占領した。1602年にオランダがジャカルタに東インド会社を設立した。1786年にイギリスがベナンに上陸しマレー半島を制圧する。1824年に英蘭条約が締結され、オランダがほぼ現インドネシアの領域を、イギリスがほぼ現マレーシアの領域を支配することが取り決められた。
- 5) この成功は、隣国フィリピンにおけるフィリピン語と比較したときによくわかる。タガログ語という特定の民族の言語を基盤としたフィリピンの国家語であるフィリピン語は、インドネシア語ほど効率的にフィリピン国内に広まらなかった。現在でもフィリピン語より英語を重視するものが多く、実際にフィリピン語が多少不自由でも英語さえできれば就職機会などで不利ではないと考えるものも多い(中原 2006)。
- 6) 高度な教育になればなるほど、教科書は英語のものを使用する割合が高まるが、高校までの教科書はインドネシア語で作成されている。
- 7) (舟田 2006)によれば、マレーシアとインドネシア両国がなるべく正書法を一致したいと考えていたことがあり、1956年にジョホール(マレーシア)で行われた第三回マレー言語・文学会議で正式にマレーシアがインドネシアに正書法一致に向けての協力を呼びかけた。インドネシアでもオランダの植民地時代に制定されたオッフハイゼン綴りと呼ばれるオランダ語風の綴り(例えば/u/の音価を'oe'と綴り、/y/の音価を'j'と綴る)などから脱して、もっと分かりやすい一音一文字の正書法の制定を目指していた。マレーシア側は、自国よりも人口の多いインドネシアで発行される実用書も含む図書が多く、それらを自国民にも読ませたいと考えていたからである。この努力は1970年代まで断続的に続けられたが、単語レベルの一致を見ることなく、1980年以降は継続されていない。
- 8) 類似の例として、中南米のスペイン語を公用語とする国々において、Español(スペイン語)という、国家の名前を冠した言語名を好まず、Castellano(カスティーリャ語・カスティージャ語)という、スペインの地域の名称を冠した言語名を好むことが挙げられる(ただし、スペインの憲法ではCastellanoと記されておりEspañolは一般的な呼称である)。
- 9) 通称ジャボデタベック(Jabodetabek)と呼ばれる地域に多くの人々が住んでいる。ジャカルタ(Jakarta)首都特別州をはじめブカシ(Bekasi)市、ボゴール(Bogor)市、デッポック(Depok)市(以上西ジャワ州)、タゲラン(Tangerang)市(バンテン州)、の四つの地区の頭文字を合わせた名称である。これらの地域はインドネシアで一番多くの人口が集中している。
- 10) <https://www.sil.org/>(閲覧日 2016年12月31日)
- 11) パプア諸語(Papuan languages)とは、オーストロネシア語族に属さず、他の近隣の言語グループ(オーストロアジア語族やオーストラリア諸語など)にも属さない言語群の総称である。
- 12) スカルノ失脚後にスハルトが政権につき(正式には1968年)、新しい秩序を唱えた。インドネシア語でOrde Baru、英訳はNew Orderである。1998年にスハルトが失脚した後の現在は旧体制と呼ぶべきではあるが、Orde Baruは固有名詞として、現在でもスハルトの体制を示す用語として用いられている。
- 13) なお、「インドネシア語口語変種」に関してはインドネシア語標準変種が基になっているので地域差はないとされており、地域的変異の研究もほとんどされていない。
- 14) Sneddon 2003およびWikipediaのLanguages of Indonesiaの項目(https://en.wikipedia.org/wiki/Languages_of_Indonesia、閲覧日 2016年12月30日)
- 15) 'Unesco Atlas of Endangered Languages'、<http://www.unesco.org/languages-atlas/>(閲覧日 2016年12月30日)参照
- 16) もちろん、ムラユ語系民族語とムラユ語クレオール変種は大きくインドネシア語標準変種・口語変種と異なっているため、教育をきちんと受けなければインドネシア語を使用することができない。
- 17) ただし、宗教的な儀式を行う際に使用する特殊なレジスターを持つ言語もある。スラウェシ北部州で話されているタラウド語もその一つで、現在も結婚式・船の進水式・家の新築・葬式などの際に使われるほぼ定型の儀式スピーチがある。このような例はH変種だと考えられるが、ほぼ1950年代生まれの人が最後の継承者となっており、これらの儀式もキリスト教とインドネシア語のスピーチに取って代わられつつある(筆者による観察)。
- 18) 804年に作成されたと考えられるジャワ文字の法律文書が残っている。
- 19) スハルト体制下では読者数が多く影響力の強いインドネシア語による新聞・ニュース雑誌は厳しい検閲の対象になり、政府が好ましくない記事が載ると簡単に休刊・廃刊の憂き目にあった。ジャワ語のジャーナリズムはその影響力が少なく厳しく検閲を受けなかったこともこの理由と考えられる。
- 20) しかし、ジャワ語教育は最新の第二言語教育・外国語教育のメソッドを用いておらず、今は使用者が激減しているジャワ文字教育や古いジャワ文化の教育が行われており、生徒にとってみれば退屈で辛いものともなりうる(Quinn 2012)。
- 21) ジャワ社会は貴族と平民の区別がはっきりしていたため、以前は平民が貴族に対してkrama体を使い、貴族同士でもそのうちの階級差によって低い方が高い方に対してkramaを使うようになっていた。現在は階級差が

- krama の使用に反映されにくくなり、職場での上下関係や年齢の上下の方が大きな影響を与えるようになっていいる。また、親しくないもの同士で krama 体を用い、親しくなると ngoko 体になるといったように親疎関係が上下関係よりも大きな影響を与えるようになっている (レスタリ 2010)。
- 22) 典型的には一人の演者が水牛の皮で作った人形を動かしながらラーマヤナの物語を語り、何人かで構成されるガムラン音楽が場面に合わせて演奏される。
- 23) 三宅良美秋田大学教授、私信。
- 24) SIL Ethnologue, URL: <https://www.ethnologue.com/> 閲覧日 2016 年 12 月 30 日
- 25) SIL Ethnologue, URL: <https://www.ethnologue.com/> 閲覧日 2016 年 12 月 30 日
- 26) マナド方言はインドネシア語標準変種と音韻、語彙、形態、統語、意味の面で大きく異なる。音韻について言えば、インドネシア語標準変種においては /i, e, a, o, u, ə/ の六母音が存在するが、マナド方言においては /ə/ があまり出現しない。ほとんどの場合は単に脱落するか (/gəreza/ → /greza/, '教会')、次の音節の母音に同化するか (/kəriŋ/ → /kirɪŋ/, '乾いている')、/a/ に置き換わる (/bəgitu/ → /bagitu/, 'このように')。またマナド方言においては、インドネシア語標準変種の /i/ が /e/, /u/ が /o/ に置き換わったり、二重母音が短母音になったり (/au/ が /o/, /ai/ が /e/ に置き換わるなど)、語末の子音 (特に閉鎖音と /h/) が脱落する、などの音声的あるいは音韻的な違いがあるのでマナド方言だと明確に判断できる場合が多い。インドネシア語標準変種で使用される、特に動詞に関わる接辞はマナド方言ではほとんど用いられないので、両者は区別しやすい。
- 語彙の面では人称代名詞、否定辞、discourse particle など多くの面で異なる。インドネシア語標準変種で多用される様々な接辞はマナド方言においては用いられることが極端に少ない。統語の面では、マナド方言にはインドネシア語標準変種に見られる形態・統語的に明確な態の交替が認められない。
- 27) トモホン インドネシア キリスト教大学 (Universitas Kristen Indonesia Tomohon 通称 UKIT) で聖書抜粋のマナド・マレー語、トンテンボアン語訳、トンダノ語訳、トンブル語訳などがある。
- 28) 2010 年国勢調査